

法匠会報

法政大学 工学部 建築学科 同窓会会報

第38号 2003年1月20日

発行所 〒184-8584
東京都小金井市梶野町3-7-2
振替口座 1-89264
TEL・FAX (042) 387-6385
法政大学工学部建築学科同窓会
発行人 服部 陸郎
編集人 会報編集委員会



「依存体質」を脱し 自己改革を進めよう！

建築同窓会会長 服部 陸郎

法政大学工学部建築学科同窓会の皆様、新年明けましておめでとうございます。

皆様には、ますます御健勝の事とご推察申し上げ心よりお慶び申し上げます。又平素は同窓会に対しひとかたならぬ御愛顧とご指導を賜り、大変ありがたく感謝いたしております。

省みますと、ここ数年わが国は土地本位制を原点とし成り立っている社会システムと社会主義経済に近い運営システムが共に行詰まり、社会全体で硬直化が進み、不透明な状態が続いております。

その為、国民の多くが将来に不安感を持っており、脱力感さえ感じられる今日この頃であります。この状態は本年も、いや数年は続くと考えられ、近々好転するような明るい材料は見当たりません。

そんな中であっても、世の殆どの人が汗を流し努力をしているのは事実です。しかしながら、今までの延長線上でただ努力すれば良い、汗を流せば良いという時代ではないのではないのでしょうか。このままでは社会全体の状況が好転するとは思えません。一方そんな中でも勝ち組と負け組みが厳然と存在しているのは、同窓生の皆様もご存知の事でしょう。

勝ち組はおそらく、現在の置かれている

環境に責任を求めず、状況を厳しくそして的確に判断して持てる全ての資源を集中し改革を断行していると考えられます。

一方負け組にはびこるのは、一言で言えば「依存体質」ではないかと考えます。

「誰れかが自分に何かをしてくれる」症候群に陥り、何を根拠に生き、何を根拠に行動しているかを見失い、結果的に前例主義となっているのでありましょう。

つまり、私たちは取り巻く環境を、嘆き悲しむのではなく、立脚する地盤を見極め、方向を定め、最も困難な自己改革をすることが要求されていると強く感じる次第であります。

建築同窓会も例外ではなく同じ状況下にあると思います。

そこで本年度は『建築同窓会飛躍の年』と捉え、最も困難である自己改革や、組織改革に挑戦し迫り来る数々の困難に臨むべきと強く感じております。

厳しいことばかり申しあげましたが、幸い建築科同窓会には多くの先輩によって築かれた長い歴史と伝統的な「絆」そして学科教授との緊密な関係が有り、又多くの素晴らしい人材を擁しております。更に最も誇れるのは同窓生全員が『想像力豊かな活き

活きた心』を持っている事であると感じております。その底力は想像をはるかに超えたものと断言します。

本執行部はこの3月で任期を終えます。任期中の皆様には多くのご心配をお掛けしたことをお詫びするし、皆様から頂戴しました多くの励ましとご指導に心より感謝すると同時に、輝かしい建築学科同窓会将来を手繰り寄せることは十分可能であると信じ、必ずそうなると確信しながら、今後のご健闘を心からお祈りする次第であります。

末筆になりますが、この一年の皆様のご家族一同様の益々のご健勝をお祈りすると共に、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い致します。本当に有り難うございました。

建築同窓会 新年会のお知らせ

内外ともに多難な年明けです。こんな時こそ師弟ともに寄り集い、懐かしい顔ぶれと共におおいに語りあいませんか。法政大学の超高層校舎ボアソナードタワーからの素晴らしい夜景を眺めながら初春の宵を楽しみましょう。

今年は会費も思いきり安く設定しました。気軽に参加してください。

日時：2003年1月30日（木）6：30

場所：法政大学市谷校舎ボアソナードタワー26階スカイホール

交通：JR中央線市谷駅徒歩10分

住所：東京都千代田区富士見2-17-1

電話：(03) 3264-9308

会費：5,000円

実行委員長 庄司智行

連絡先：(株)アノン 服部陸郎

hattori@anoncorp.co.jp

会費納入は自動払込みで

「法匠会報」は皆さまの納める会費で作られます。会費納入に御協力下さい。

同窓会費は年3,000円郵便振込みで納入いただいております。なお自動払込みの方法も設けておりますのでご利用下さい。

1：郵便貯金通帳のある方

郵便局窓口で「自動振込利用申込書」をお持ちの通帳の口座番号、住所、氏名をご記入捺印の上、窓口に出していただくだけで、簡単に手続きは済みます。

2：郵便貯金通帳のない方

郵便局の窓口で通帳をおつくりいただき、前

記1の手続きをしてください。

3：それ以外の方

会報と同封の払込取扱票（手数料なし）にてお願い致します。その他は郵便局にて振込用紙に下記の宛名と口座番号をご記入いただき、ご協力お願いいたします。

口座番号：00110-5-89264

加入者名：法政大学工学部同窓会

住所：東京都小金井市梶野町3-7-2

同窓会事務局 電話 042-387-6385

第15回 法匠セミナー

去る10月19日の午後、第15回法匠セミナーが市ヶ谷の富士見校舎の532号の階段教室で開催されました。

服部同窓会長の挨拶の後、永瀬克己先生の講演、富永譲先生の講演、そのあと質疑で締めくくられました。お二人とも準備万端、豊富な資料を使ったお話で、そのあと開かれた懇親会の時間にも喰いこむような熱の入った講演会となりました。

永瀬克己先生

かたちの世界への彷徨

永瀬先生の講演は「かたちの世界への彷徨」でした。先生は法政大学を1986年に卒業の第16期生で、卒業後は大学院へ進学、その後は會田雄亮研究所を経て法政大学助手、専任講師として後進の指導に務め、今年度から助教授に昇格しました。

その間、デザインや造形面での制作活動と民俗建築を中心とした研究活動に業績を積み上げてこられました。作品として、川口衛教授との共同の「イナコスの橋」、「小金井市立総合体育館」などがあり、研究面では修士論文で「建築と人間の対応に関する研究」を取り上げ、建築では珍しいアイ



マークレコーダー(EMR)を使って形に対する人間の目の動きを研究しました。著作では『建築設計演習 基礎編』(彰国社 武者英二先生と共著)、『建築設計演習 応用編』(武者英二・宮宇地一彦先生との共著)のほか、『図説民俗建築大事典』(柏書房)では編集委員長として執筆・編集にあたっています。

セミナーでは、これまでの活動の中から形を1.二次元の世界から2.三次元のフォルムの構成3.ゲシュタルト特性4.さまざまな形5.集落、と整理して形を概念を体系化して、わかりやすく説明されました。身の回りにあってお互いに脈絡がなく存在する形が、みごとに整理された明快なお話の講演でした。このような理論が、設計計画などの建築教育に大いに貢献されることが期待されます。

永瀬先生は同窓生として親しく接していただいておりますが、その研究内容をうかがう機会は意外に少なく、今回は大変貴重な機会となりました。こういう機会をつくれる法匠セミナーのよい例となったといえるのではないのでしょうか。

富永譲先生

ひらたタウンセンター



富永譲先生は「ひらたタウンセンターについて」の題目でした。富永先生は、東京大学を卒業後、菊竹清則建築設計事務所、東京大学助手を経て、現在富永譲+フォルムシステム設計研究所を主宰する建築家で、この4月から法政大学教授に就任されました。

先生は住宅を中心に設計活動を続けてこられ、作品としては「ひらたタウンセンター」のほか多数、コルビュジェの研究者としても著名で、『建築家の住宅論』(鹿島出版会)ほか多数の著作があります。

「ひらたタウンセンター」は山形県にある人口1万人足らずの平田町で、6年前に町の中心施設としての公開コンペが行われたものです。その後のワークショップを経て、その間、現地へは100回以上訪問して設計を詰め、ようやく2000年4月に「医療・保険・福祉」の町の総合拠点としての1期工事が完成し、今年の7月に2期工事が完成、「学習・情報・文化」の機能が追加されたものです。

ここでは、診療、集団検診、調理実習、リハビリなどのほか、図書館、約200席の固定席ホールなどの複合施設となっています。複雑な機能を持つ施設計画として、パッサージュホールという大きな軸線を設けて、ここからウィングを出してさまざまな施設が設けられています。

お話の中で、この施設が、町の人から好意的に受け取られ、細かい部分のデザイン、納まり、構造、設備などいたるところに新機軸が打ち出されていることも知ることができました。

なお、「ひらたタウンセンター」については、『新建築』2002年10月号にも詳細な記事が紹介されております。セミナーに参加できなかった方もぜひこれを参照して富永先生のお仕事に触れていただくとよいと思います。(中田正二)

たるき

《印刷メディアの危機——Paperless is moreになるか》

このような会報も発刊されることが危ぶまれている。

それは1にも2にも台所事情による。印刷はできても郵送する費用が足りないのである。建築でも5000名をこえる卒業生に送るのには、1人あたりは小さいが全体では大きな額となる。

それでは郵送をやめて他の方法はないか。インターネットのホームページがすぐ浮かぶ。しかし用意しただけではなかなかアクセスしてくれない。ならば送ってしまおうと思ってもハードがない人もいる。どのみち印刷の如何に拘わらず発信するには、デジタル原稿はつくらねばならないのでホームページとして見られるようになっているのが求められるだろう。

《透過原稿と反射原稿》ある先生から聞いたことで面白いと思ったことがある。TVモニターのように後から光が出てくる透過する文字原稿は記憶に残りにくいのが、印刷原稿のように光を発しない反射原稿は、記憶に残りやすいということである。これはどういうことなのか考えてしまった。

前者は光刺激として強く働き、モニターからは情報が出てくるという無意識的な心理がはたらく。つまり読者は、受動的になっているのである。後者の印刷原稿は光を発しないので、比較的に刺激は弱く、こちらから何かを掴もうとエネルギーを発していかなければならない。能動的なのである。その違いが認知に影響するのではないかと筆者はかつてに推論している。

《届くこと、残ること》郵便局を通り配達員が届けてくれる。広告物が多く閉口している向きもあるが、同窓からの郵便は、別で何とはなしに目をとおしている。そして書かれたことが記憶に残っている。ファイルに挟んでおいたものが、ネットワークを張るとき、過去を振り替える時の参考にもなっていた。

食の世界では、ファーストからスローフーズへと噛み締めるもの、時間をかけることの意味を再考するようになってきた。そのほうが体のバランスによいと気付いたからだろう。

シャワーのようなインターネット情報しかり、便利であるが、その過多は消化不良へとつながる。こういう時だからこそ受動的でない汲み取っていただけるものが求められてよい。

反射原稿の有用性を書いてしまったが、郵送の問題は解決していない。ここにきて同窓会組織が緩やかに一本化する。そこでの発信時に合わせて同封することができないだろうか。(永瀬)

お元気ですか

高い目標に挑戦し続ける 石川弥栄子さん

行政の最前線をずっと歩んで来た石川さん。勤務と同時に大学院へ通い、建築学会等の委員を務め、それを自然体でこなし、何事も無かったような顔をして「女性ネットワーク」の代表を務め、定例会に顔を出す。激務をこなしながらいつもニコニコしているチャーミングな先輩です。



一番印象に残っている先生は？

大江宏先生です。人間の本質的な面を大切にするように教えて頂きました。

公務員になることを大江先生はどういわれましたか。

大江先生ご自身が大学卒業後文部省に入られたと伺いました。広い視野で仕事が出来から公務員も良い選択だと賛成して下さいました。特にこれから発展する千葉県はやりがいのある職場になるからと喜んで下さいました。

初めは千葉県庁だったのですか？

昭和38年に千葉県庁の建築課に勤務し、県立高校や保健所等の設計・積算・工事監理を一貫して担当しました。その後、東京都職員となり、昭和48年に住宅局勤務になりました。

東京都ではどんな仕事をなさったのですか。

年度別の都営住宅の標準設計、団地のなかに建つ保育園や図書館の設計、都心居住を目指した再開発やまちづくり事業等を担当しましたが、一番、興味があったのが高齢者住宅の仕事です。東京都や区市町村の「高齢者住宅計画」、高齢者向け住宅「シルバーピア」の建設計画、加齢対応型住宅(バリアフリー住宅)普及のための「ハンドブック」や「設計・施工の手引」の

作成等、面白い仕事を担当しました。

高齢者住宅への取り組みは先駆的ですね。そんなに忙しいのに、いったい大学院へはいつ行かれたのですか。

住宅と福祉を結びつけた高齢者居住の勉強をしたいと思い、近くて夜間の講義もある日本大学の理工学研究科に通いました。福祉分野の木下茂徳先生と野村歓先生のご指導を頂き、昭和62年から平成2年の修士課程では「市街地における高齢者の居住機能の確保に関する研究」、平成7年から11年の博士課程では「入居者の生活実態からみた「シルバーピア」のあり方に関する研究」を論文にまとめました。そして平成11年3月に博士(工学)を取得しました。高齢者の居住政策が都政の重点事業になった時期と重なり、多忙を極めていました。

勤務時間後に大学に行き、指導を受けて役所に戻り、仕事の決着をつけてから帰宅するような状況でした。

いったい何時に帰れるんですか。

帰宅は深夜、山手線の最終に駆け込む日々もありました。夜まで目一杯役所の仕事をして帰宅後すぐに就寝、気分転換して早朝の2・3時間を論文作成にあてていましたが、私は熟睡タイプなのでそれでも大丈夫でした。

私にはとても真似が出来ない生活ですね。その後はどんなお仕事をしていますか。

現在、勤務している高齢者住宅財団から専門性を生かした仕事をするようにお誘いを頂きました。都や地方の計画策定や生活援助員の業務ハンドブックの作成や研修等で、忙しく飛び回っています。他にもいろいろとおやりになっていますよね。

ええ、法政大学の大学院の非常勤講師をさせて頂き、その他に東京都住宅バリアフリー協議会やUIFA(国際女性建築家会議)等の活動をしています。

お母様の介護もなさっていらっしゃるのか。最後に後輩にアドバイスはありますか。

後輩の人達から「公務員はどうか」と聞かれることがありますが、「女性には

略歴

1963年 法政大学工学部建築学科卒

1999年 工学博士取得

2000年 東京都定年退職

現在 (財) 高齢者住宅財団開発調査首席研究員



都庁退職の日、女性建築職の人たちと



2001UIFAウィーン大会ドナウ船上ドラトゥール会長と



UIFAホテルでの会議打合せ

良い職場です！」と答えています。大江先生がおっしゃったとおり、広い視野で仕事ができますし、行政の仕事は市民生活に密着していますから女性に有利な活動分野です。是非、チャレンジすることをおすすめします。

お忙しいなか、ありがとうございました。(インタビュー：安藤照代)

身近な本棚

『イスラーム世界の都市空間』

陣内秀信・新井勇治編

A5判 7600円・法政大学出版局刊

長年続けてきたイスラム都市建築の調査研究がついにまとまった。シリア、チュニジア、モロッコ、トルコ、イランから中国西域まで、イスラーム世界の迷宮空間の構造と魅力

を明らかにする。編者の一人新井勇治君は、イスラム世界の調査研究に邁進し、ダマスクス大学に留学後、1999年大学院博士課程で単位を取得、研究と執筆の活動を続けている。



川口 衛先生退任記念フォーラム&パーティ

川口衛先生が2003年3月をもって定年を迎えられます。先生は1957年法政大学の教壇に立てられて以来46年間教育につくされ多くの人材を送ってこられました。

先生の退任を機会に最終講義とパーティを右記のとおり行います。

連絡先：建築学科阿部優研究室

構造デザインフォーラム

日時：1月17日(金) 4時～6時

場所：法政大学市谷校舎ボアソナードタワー26階スカイホール

パーティ

日時：フォーラム終了後6時半～8時半

場所：同所

風と迷信

川口 衛

川口先生から原稿をいただいた。先生はこの3月で46年にわたって教壇に立たれた法政大学を退職される。ほとんどの卒業生が先生の授業を受けたはずだ。先生は教職のかたわら設計の実務を続け、建築界に独創的な構造技術の提案を続けてこられた。

一方で、趣味も広く、民謡のノドは一流だそうである。こ

の一文には先生のご趣味の民謡から、構造の極めて専門的な知識を分かりやすく解き明かす、いかにも川口先生ならではの、魅力に満ちた語り口が十分に盛り込まれている。

先生は同窓会活動にも大変ご理解があり、法匠セミナーをはじめ、ことあるごとに熱心なご支援をいただいたこともここに特記して感謝の意を表しておきたい。

木枯らしの気になる季節になった。暖房完備の都市生活にどっぷりと浸かっていると、自分達が大自然の中にいることを、つい忘れがちであるが、通勤途中のコートの襟から吹き込む寒風が、ふと人間の存在のちいささに気付かせてくれたりもする。昔の人々の生活は、われわれの日常に比べれば、はるかにもっと自然に曝されており、嵐もそよ風も、もろに肌で感じ取られていたに相違ない。

風と民俗

われわれの祖先たちが風をどのように受けとめ、また、風を媒体にしてどのように彼らの心情を吐露してきたかは、色々な方法で垣間見ることが出来るが、今も各地に残る日本民謡によっても、ある程度窺い知ることが出来るように思う。

風も場所により季節によって、受けとめられ方が異なる。

春の風を唄ったものとしては、
「愛宕お山に春風吹けば 安来千軒花吹雪」(安来節、島根)

「来る春風水が解ける うれしや気ままに開く梅」(越中おわら節)

などがある。後者は越中八尾の「風の盆」の唄として有名で、台風襲来の時期に唄い踊られる。

夏の唄は少ないが、たとえば
「あいの風さは男でないか 寝とる寝肌へそよそよと」(田切唄、石川)

などという、艶っぽいものがある。この場合のあいは、北または北東の涼しい風を指している。

秋の唄は淋しい。
「月の光は隈なくて 秋風のみぞ身には沁む」(黒田節、福岡)

「峰の嵐か松風か 尋ねる人の琴の音か」(同上、平家物語よりの一節)

冬は
「寒や西風しら吹く棚で こぼす涙は棚の上」(寒天屋唄、京都)

「河内の奥は朝寒いとこじゃ 御前の風を吹きおろす」(かんこ節、石川)

などと、聞くからに寒い詩が多い。“御前”は白山の主峰を指している。

風を詠む民謡の中で最も多いのは、風向

きの影響を唄い込んでいる文句である。民謡は、よく知られているように、主に江戸時代の日本海航路を媒介として各地に広まった経緯もあって、風と帆船との関係で、風向きが詠み込まれている唄が多いのは、むしろ当然かもしれない。

風によって航路がまなならぬことを唄ったものとしては、

「千石積んだる船でさえ 風の吹きよ出て戻る」(津軽よされ節、青森)

「南風吹かせて船下らせて もとの千石積ませたい」(遠島甚句、宮城)

「東新曾根も西新曾根も 風が南風なら間切られぬ」(潮替節、鹿児島)

“間切る”は風上に切りあがることで、ヨットのクロスホールドに相当する航法である。

まなならぬ風に気をもみ、待ちわびる心を詠んだものとしては、

「あいが吹かぬか荷が無うて来ぬか ただし新潟の川どめか」(両津甚句、佐渡)がある。この場合のあいは、東南の風である。

風向きによって、大漁や豊作をもたらす恵みの風もある。

「沖に大漁の南風が吹けば 島に黄金の花が咲く」(遠島甚句、宮城)

「吹けや生母内だし七日も八日も 吹けば宝風稲みのる」(生母内節、秋田)

“生母内だし”は駒ヶ岳から吹き下ろす東風で、当地では豊年の兆しとされている。

風向きを唄っているものの内でも数多いのは、風の気まぐれに絡むものかもしれない。

「おまえ吹く風わしゃ飛ぶ木の葉 どこへ落ちるも風次第」(秋田甚句)

「山背風だよあきらめしゃんせ 俺をうらむな風うらめ」(最上川船唄、山形)

山背風は山から沖に向かう順風で、船乗りは出航しなければならない。これに対して

「追風吹こうと下津井入りや ままよ浮き名が巽風」(下津井節、岡山)

と囁いて、遊里を離れぬ者もいた。“巽”は東南の風に、(浮き名が)“立つ身”をかけている。



風の中でも、ありがたくないのは、いうまでもなく暴風である。このため、嵐、時化、吹雪を詠んだ唄も少なくない。

「その時時化に遭うたなら 綱も碇も手につかぬ 今度船乗やめよかと」(秋田船方節)

「沖の黒いのは蟹田の嵐 親父帆を負け舵も取れ」(十三の砂山、青森)

「雪の新潟吹雪に暮れて 佐渡は寝たかよ灯が見えぬ」(佐渡おけさ)

台風に対する稲作の無事を祈る「二百十日に風さえ吹かにゃ……」という文句は、前掲の「越中おわら節」をはじめ、多くの地方の唄に見ることが出来る。

風と迷信— 1

(罪のない俗信)

暴風の前に人が無力であるのは、昔も今も変わらない。

ただ、昔は暴風の生成の原因も分らず、予知も出来なかったから、ひたすら恐れる以外にすべがなかったわけである。このような場合に出現するのが迷信である。迷信は自然現象に対する科学的認識が皆無のまま、自然を相手に行動しなければならない場合の根拠となるのであるから、それなりの“権威づけ”が必要である。権威づけは多くの場合、神話や宗教によって行われた。たとえば、ギリシャ神話では、東西南北の風向きそれぞれに支配する神があり、アテ



渦潮は時計回りも、反時計回りもある。
この例は時計回り。

ネのアクロポリスに今も残る八角形の「風の塔」の壁面上部には、合計8人の風の神のレリーフが見られる。わが国の神話では、しなつひこ 紬長津彦命としなとべ 紬長戸辺命などの名がでてくる（記紀）。また、風の神を祭る社として古くから朝廷が重用したものとしては、奈良県の竜田神社および長野県の諏訪明神が知られている。仏教では、京都三十三間堂の風神像と、俵屋宗達の風神画（国宝一前掲）が有名である。

朝廷の暴風対策の権威づけは、主に中国から輸入した陰陽五行説が拠り所になっていたようである。陰陽五行説によると、風は木火土金水の五原素の内「木」の氣に属し、また、蛇、髪、反物など、細長いものと同類だどうぐという。一方、五原素間の勝負の原理、相剋順によれば、「金剋木」であって、金氣のものが木の氣のものに勝つことになっている。

このような「道理」から、人面蛇身の諏訪明神が風を司る社として重視され、また、一般の習俗でも、強風を鎮めるのに屋根の棟などに鎌（刃物）を取り付けるまじな呪いが広く行われた。これらはナイガマ（薙鎌）、カゼキリカマ（風切鎌）などと呼ばれていたらしい。

風と迷信－2

（始末の悪い科学的迷信）

上に述べたような習俗や呪いは、素朴な迷信であり、自然現象に対する科学的な把握はまったくなされていない。このような俗信的な行動を実際に行っていた人達も、それが実効のあるものでないことを、頭のどこかでは分っていたのであろう。その意味で、この種の習俗や呪いは罪のない存在であったということが出来よう。これに対して、現代には科学的迷信とも言うべき



揺れるタコマ・ナローズ橋。風速は19mでほぼ一定。

誤った俗信があり、これは上記のような素朴な迷信に比べて、はるかに始末が悪い存在のように思われる。

現代は、昔に比べれば色々な自然現象を科学的に把握できるようになってきたし、われわれ一人一人がそのように努力しようとする姿勢も、普及してきたと思われる。

しかし、各人が自然現象を隅々まで理解するというのは、実は、それほど簡単ではない。したがって、世の中には「権威づけられた」説をそのまま鵜呑みにしようとする傾向があることは、昔とあまり変わってはいない。現代の「権威」は教師、学校、講座、教育番組、文部科学省などである。

風に関する科学的迷信の例のひとつに「コリオリ効果」の説明を挙げることが出来よう。コリオリ(Coriolis)の力は、言うまでもなく、地球の自転に基づく見掛けの力であり、北半球で移動する物体には右向きの、南半球では左向きの力が作用する。その結果、北半球では低気圧に向かって吹き込む風は反時計回りに、高気圧から吹き出す風は時計回りに吹く。この説明は正しい。しかし、この原理は、北半球の流体の運動にはあまねく適用できるから、鳴門の渦潮も、洗面器の排水もみんな反時計回りに回転するのだと説明する中学、高校の教師が、少なくないらしい。これは、現象の時間的、空間的スケールを無視した教師の、誤った

解釈であって、実際には上記2例程度のスケールではコリオリの力は顕れず、海底の地形や、排水口のしくみの影響で、時計回りも反時計回りも起り得るのである。（写真参照）

今一つの例は、比較的最近、NHKの教育講座で、ある物理学の高校教師が実際に行っていた説明である。彼は振動のテーマの中で、共振に関する例として、1940年のタコマ・ナローズ橋の振動による落橋を挙げ、その原因は「風の息」と橋の固有振動周期が一致したことによるのだと説明していた。これは、大変な誤解である。タコマ・ナローズ橋に生じた実際の現象は、ほぼ定速度の風の中から、この吊り橋が自分の振動に都合の良いエネルギーを取り入れながら、次第に運動を増大して行き落橋に至った、典型的な「自励振動」の例であり、風の息の周期とは全く無関係の現象である。

このような例は他にも挙げることが出来るが、自然現象に対する教師の間違った解釈が原因で、一生誤った自然認識をさせられる生徒・学生は悲惨である。昔の俗信とは異なり、その知識には科学的な裏づけがあると信じているだけに、始末が悪いのである。

教育に携わるものにとっては、特に注意すべきことのように思われる。

身近な本棚

『エドゥアルド・トロハの構造デザイン』

エドゥアルド・トロハ著

川口 衛監修・解説

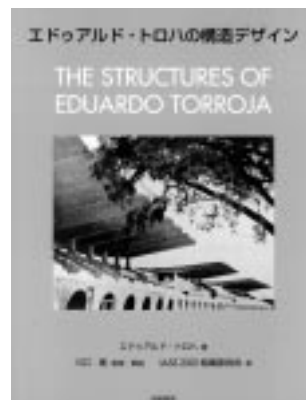
発行 相模書房

B5判 210頁 2,400円

20世紀スペインが生んだコンクリートシエルの鬼才トロハ。その名前だけはよく知られているが、作品となると漠然としているマボロシの構造家。本書はトロハ自身が自分の代表作をとりあげ、構造とデザイン

の考え方を数式をいっさい使わず、反対にスケッチと写真をふんだんに使って、極めて平明に語ったもの。構造の原理に立った素朴とすら思える簡明・率直な発想から生み出された解決法は、目からウロコが落ちるような鮮烈な感動を覚える。

巻末にはスペインの山奥まで分け入って、トロハの作品を全て見て歩いたという川口衛先生によるトロハの人物と経歴のくわしい紹介がある。川口先生のトロハへのあつい思い入れが伝わる一文である。



MYホームページ特集2003

あなたのホームページ紹介します。情報を下さい。 toy-ishiguro@col.hi-ho.ne.jp



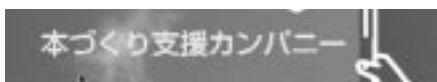
森田美紀

(1990年卒)

アーククルーのホームページが出来ました。現所長は私こと森田美紀（現姓：本保）前所長は景観計画の福川成一。ランドスケープ事務所です。ホームページは夫の本保卓哉（91年卒）が作ってくれました。かなりいい出来です。アクセスしてみてください。今は、Webデザイナー並みの請求が来なければいいな…とそれだけが心配です。11月15日発売の『季刊ランドスケープデザイン30号』に最新作「公立刈田総合病院リハビリガーデン」が掲載されております。このお仕事では、たくさんの方の法政OBの方々にお世話になりました。吉江庄蔵先生、芦原太郎建築事務所小林仁氏（86年卒）、堀池秀人アトリエ柳沼昌弘氏（86年卒）大変感謝しております。私共はランドスケープを中心に仕事をしております。お役にたつことがあれば、何でもお気軽にご相談下さい。

(株)アーククルー

<http://www.ark-crew.co.jp/>



小川 格

(1966年卒)

編集事務所ってなにやるところ？と必ず聞かれます。一般には建築家以上に分からない業種です。

そこで、私が何をやっているのか、一目で分かっていたらいいように、ホームページを作りました。本作りにはたずさわった編集者の気持ち、著者とともに味わった感動が伝わったらいいな。

今年退職された佐々木広先生の最新の評論が読める「佐々木宏の室」もついています。

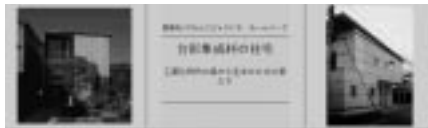
南風舎

<http://www.nampoosha.co.jp/index.htm>

「私の逸品」

とっておきの愛用品情報をお知らせ下さい。
toy-ishiguro@col.hi-ho.co.jp

石黒豊明（1972年卒）



趙 海光

(1972年卒)

ホームページを開設して二年になります。最初はほとんど反応がなかったのですが、毎週更新するようになってから、一気に読者が増えました。現在は一日の平均アプローチ数約20名。一週間で150名ほどの人が見ている勘定です。全部を更新するのは大変なので、更新はトップページとコラム欄のみ。毎週月曜日の午前中に作業して、昼前には発信しています。

もちろんぼくはただボケーと見てるだけで、やってくれるのはスタッフなんですけどね。機会があったら、どうぞ覗いてみてください。アドレスは下記。

(株)ぷらん21

<http://www003.upp.sonet.ne.jp/umihiko/>



猪野 忍

(1966年卒)

昨年春、事務所の通りに面する部分に小さな展示スペース、ギャラリー・イノスを併設いたしました。

美術関係の友人の助言を受けながら、現代美術を中心に企画展示を行ってきております。彫刻家や画家、版画家、写真家、工芸作家など、さまざまな分野のアーティスト、作家達をはじめ、近くに住む町の人々との交流の場所ともなれば幸と思い企画したものです。初端の研究展示以来、記名いただいた方々だけでもすでに延べ1400名を超え、時折、ギャラリーを支持してくれるメッセージが扉に挟められていたり、楽しみにしてくれている人々も増えているようです。作家達との会話、議論だけでなく、彼らの知人や来訪者のネットワークにも侵入させてもらいながらジャンルを越えたあらゆる人々との交流のただ中で、活気に満ちた時間を過ごそう楽しもうとしているところです。

ギャラリー・イノス

<http://home.att.ne.jp/sky/inos/>



奥島憲晶

(1981年卒)

東京暮らしからUターンして早や10年、北国の家づくりに邁進中です。

エネルギーの無駄遣い

いをしない家づくりを心がけております。

11月中旬、計画に3年かけた住まいが竣工。テーマは、ローコスト、ローインパクト。珪藻土+阿寒の貝化石+すさを織りまぜた塗り壁、無垢の木肌、非VOC対策、高气密・高断熱（隙間相当面積0.35）、パネルレスの温水輻射暖房、DCモーター採用の計画換気…

北国仕様の快適な住まいを、EARTH-CRAFTSのホームページで、ご紹介していきます。

EARTHCRAFTS 住・空間研究室

<http://homepage2.nifty.com/earthcrafts/>

これまで紹介した

HOME PAGE ADDRESS

一挙公開！

宮脇ゼミ

<http://www.boreas.dti.ne.jp/~msemi/>

1970 石森修一郎

<http://www.ishimori.co.jp/>

1970 横山正登

<http://www.mis.ne.jp/~adpers>

1971 小島建一

<http://www.pluto.dti.ne.jp/~kekojima>

1971 山本純弘

<http://www3.plala.or.jp/yyarch/index.html>

1973 谷澤 明

<http://www2.aasa.ac.jp/people/kanare/>

1974 山田 清

<http://homepage1.nifty.com/himnet/>

1976 浦部 求（砂川）

<http://www6.shizuokanet.ne.jp/usr/motom/>

1980 小堺文彦

<http://www.archivision-inc.com/>

1990 鈴木茂雄

<http://homepage2.nifty.com/sync/>

1992 川崎（旧姓：乾）圭子

<http://www.doitu-omocha.com/>

法匠女性ネットワーク

小金井祭参加イベント

海外の建築・開発プロジェクト紹介

11月2日(土)小金井祭のイベントに参加しました。今年のスピーカーは3組とも運営委員のメンバーです。まず、メインテーマで2つの海外プロジェクトが紹介されました。

安藤照代さん(67年卒)と梅松禮子さん(70年卒)からは、2000年にフィンランドを訪れた際の見聞から、ヘルシンキ市中央駅裏の国鉄操車場跡地開発の現状を聞きました。フィンランドでは地区や建築の計画にコンペが多用されているとのことで、当地区でも計画や設計の各レベルでコンペが行われています。コンペで採用され、現在実現しつつある基本計画や設計とともに、かつて提案されたサーリネンやアールト等による開発計画も紹介され、長い時間をかけて計画が確定してきた過程を知ることができたと思います。

小川かよ子さん(67年卒)からは、モンゴルの国際子どもセンター・日本館建設プロジェクトの話の聞きました。このプロジェクトは、(社)長寿社会文化協会(WAC)が中心となって、ボランティアと寄付により進められているもので、小川さんもボランティアで設計に係わっておられます。施工技術等を考慮して提案したプランが、「日本らしくない」ということで難色を示され、モンゴルの方がイメージする“日本風”に書き直したこと、ラフな設計図に沿って、モンゴルの人たちによって(かなり大雑把に)施工が行われようとしていることなど、非常に興味深い話を伺うことができました。

若い出席者からの質問や感想が多く、海外でのボランティア活動に強い関心が持たれていることが伺われました。



【番外編】

私的・遺跡の迷い方 印・パの仏教遺跡等

番外編として、村上由紀子さん(88年卒)からインドとパキстанを旅した際の写真を見せていただきました。村上さんは、卒業以来アジアの遺跡を訪ねて各地を旅行しているとのことで、パキстанの写真の中には、今は踏み込めなくなっているアフガニスタンとの国境近くのものも含まれていました。遺跡の写真も面白かったのですが、子供たちや暮らしの風景を写した写真が生き生きとしていて、村上さんが現地の人たちと触れ合いながら旅する様子が私たちにも伝わって来る、楽しいスライドショーになりました。

小金井祭へは2年ぶりの参加でしたが、今年は学校のホームページへの掲載という思いがけない支援がありました。さまざまな場面でご支援をいただいた建築学科の永瀬助教授と学生生活課の土屋氏に紙面を借りて感謝申し上げます。

(実行委員長 '72年卒 熊坂ひろ子)

特別養護老人ホーム 「風の村」を見学して



女性ネットワークは9月10日(土)千葉県八街市にある特別老人ホーム「風の村」(設計指導 外山義、特別養護老人ホーム50名、ショートスティ7名、ディサービスセンター、在宅介護支援センター、運営 社会福祉法人たすけあい倶楽部)を訪れました。

「風の村」は先駆的なユニットケア特養で「自分が高齢になり在宅で生活することが困難になった時、入居したくなるようなもうひとつの我が家」と言うコンセプトで出来上がったそうです。入居のお年よりの中には気に入らないことがあるとドアをけって壊したり、コンピューターを投げて壊したりした人がいました。しかし、台所で洗い物などの仕事を始めてからは心やさしい、周囲に気配りをするようになり、次第に皆から愛され、人気者になっていったそうです。まさに自宅に居ると言う感覚で落着きを取り戻していったようです。

開設より2年経った施設の中庭は植木が建物になじみ、心温まる雰囲気をかもし出していました。

この施設が八街市のほぼ中央、杉林と畑に囲まれた処でなく、もっと都心にあったなら、家族は時間のあるときにちょっと訪れ、一緒に過ごすことが出来ます。又、町の人々との交流も盛んになるでしょう。そうならばもっと「自分がこんな風に暮らしたいもうひとつの我が家」になるのではないのでしょうか。

身近な本棚

幻の『民家図集』復刻なる
写真集『よみがえる古民家』

A4判 464頁、柏書房刊、13,000円

昭和初期に柳田国男・今和次郎・石黒忠篤・大熊喜邦・武田五一・小林古径・佐藤功一というような錚々たる人物が監修した緑草会編『民家図集』が発刊されているが、幻の写真集と言われている。それは会員頒布の非売品で一般には渡らなかったからである。それを古川修文・永瀬克己・津山正幹・朴賛弼氏が改題を加え編集復刻したもので、写真家の浅井慎平氏や作家の林望氏が推薦。



『水辺から都市を読む—舟運で栄えた港町』

陣内秀信・岡本哲志編著 A5判

450頁 法政大学出版局 4,900円

自動車が物流を支配する以前、都市間には舟運によるネットワークが張り巡らされ、都市は舟運によって息づいていた。アムステルダム、ヴェネツィア、蘇州、バンコク、瀬戸内海、伊勢湾、知多半島と世界の舟運で発展した都市を訊ねあるき、その構造と魅力を解明する。現代都市が忘れていた生産流通の記憶をとどめた都市の感動を伝えてくれる。

本書の主な執筆者岡本哲志君は1981年卒で、現在、岡本哲志都市建築研究所を主宰している。



小金井キャンパスから

建築設計製図2002／前期 優秀作品模型展

建築学科では演習の中心的軸のひとつとして各学年に「建築設計製図」を置いています。そこでは建築における基本的、現代的な諸問題を建築形態によって表現すべくさまざまな課題が出されます。

前期に行われた2年、3年、4年の建築設計製図作品を今年度よりファイナルレビュー・ウィークを設け講評会を公開しました。

各学年ごとに多くの作品を講評、先生方により代表を選び、模型を中心に展示。1年生は基本的製図言語の習得段階ゆえにこの段階での作品展示はありません。工学部、情報科学部の学生にも見られるように展示公開し、学部間、各学科間の学生のコミュニケーションが広がることも意図しています。

展示期間：2002.9.18（水）～24（火）

展示場所：小金井キャンパス西館ロビー

展示作品：2年 **有富 静**「THREE PATHS」（幼稚園の設計）、3年 **太刀川英輔・大石卓人**「MEDIATEQUE ANNEX PROJECT」（図書館別館）、**八里直輝**「MEDIATEQUE ANNEX PROJECT-Out door style」（図書館別館）、4年 **長谷川 徹**「GINZA2020 CHAOS」（銀座複合ビル）



西館ラウンジ会場に並んだ作品

夏休みに学ぶ「建築実務実習」 希望者多数 同窓生の協力に感謝

夏休みを使って実務を学ぶインターンシップの「建築実務実習」（3年）に今年も多くの学生が参加しました。実習先は、建設現場や構造設計事務所（5名）、環境・設備関係事務所・文化財保護関係（3名）意匠設計事務所・インテリア・ランドスケープデザインオフィス・写真家・建築関係出版社／編集事務所など（44名）：（合計52名）とさまざまな実習後のレポート提出と発表では、皆異口同音に実務の厳しさを肌で感じたようでした。実習先からはフレッシュさと現代の若者感を捉えることができた。先輩諸兄姉の協力には感謝申し上げます。（担当：渡邊・古川・阿部・永瀬）

渡邊先生建築士会優秀賞

第17回日本建築士会連合会賞優秀賞（作品賞）を渡邊真理教授とパートナーの木下庸子氏が受賞しました。建物名称は「日本基督教団ユーカリが丘教会＋光の子児童センター」（千葉県佐倉市）。礼拝堂と学童保育そして高齢者福祉施設をもち、円弧の壁を挟んで空間が展開する構成。詳細『建築士2002.11』参照。



建築研究賞2002決まる

2001年度創設された卒業論文に対しての賞「建築研究賞」の2002年度が決定した。卒業要件の論文は2002年10月末日締められ、大学祭後の11月11日計画、構造・環境と分野別に全提出者発表、そこから選考を行いさらに講堂で公開による発表を経る。そして教室会議の最終評価により次の学生が受賞に決定した。発表会に出席した後輩達には大きな刺激になっており、各分野での研究とは何かを伝えるものとなっている。賞は賞状とともに記名入りのメダルが卒業式の日に授与される。第2回2002年度の受賞者は以下の通りです。



◆「沖縄におけるRC造建築物の温熱環境改善に関する研究～新城小学校編」**加賀美長央・坂本啓子・太田研一**（古川）、◆露店建築 今も残る戦後闇市のあと **高橋亨**（高村）、◆「都市パラサイト論」ーホームレスの生活空間における生き延びるためのデザイン研究ー**林泰寛・宝田拓磨**（永瀬）、◆質点系モデルによる建築一地盤系 地震応答解析 **谷澤博樹・八島佑介**（吉田）◆地蔵尊からみる町民の意識の変化 富山県八尾町についてー**長森史恵**（陣内）

学生チャレンジサポート

社会貢献や積極的な学生の発信活動に対して大学では「学生チャレンジサポート」システムとして補助を行っているが、工学部学生からは4案が採用され、その内3案は建築学科の学生であった。

工学部情報紙「CREATE」 ホームページになる

これまで工学部の学生・教員・職員を結び学内紙として「CREATE」が発行されていたが、ほとんどの学生がパソコンを持ち、インターネットを利用しているのでそれに合わせた対応として2002年度後期に情報科学部も対象にしたホームページ方式に転換した。

人工衛星による設計製図講評

人工衛星を介して遠隔地と講議を行っているSCS（Space Collaboration System）利用の今年度公開講評会は鹿児島大学と。

日時：2003年1月18日（土）午後1時～4時

場所：小金井校舎西館マルチメディアホール。
法政大学－鹿児島大学双方の2年生の建築設計製図における共通課題作品を対象に講評。



卒業設計公開講評会/予告

2002年度の卒業設計公開講評会が下記日程で開かれます。

日時：2003年2月1日（土曜）1時～5時

場所：小金井校舎西館地下1階

マルチメディアホール

特別審査員：小嶋一浩・千葉学・手塚貴晴
レセプション：学生ラウンジ（予定）

第4回東京再生研究会セミナー



2002年11月21日小金井キャンパスにおいて東京再生研究会の第4回セミナーが開催された。テーマは「歴史と生態系の文脈から武蔵野の再生を考える」**進行・趣旨**：陣内秀信（法政大学教授）、**コーディネーター**：永瀬克己（法政大学助教授）「環境基本計画づくりへ」、**パネリスト**：小谷俊哉（NPO法人グリーンネックレス）「鉄道の高架化と緑化」、倉 宗司（小金井市役所）「雨水浸透と湧水保全」、神谷 博（法政大学非常勤講師）、星野義延（東京農工大学助教授）「武蔵野におけるみどり」の各先生方によるもの。ちなみにこれまでのセミナーの題目は下記ようになります。

第1回／2001年12月11日

「歴史と生態系の文脈から」

第2回／3月11日「東京都心再生を考える」

第3回／7月23日「東京下町再生を考える」

東京再生研究会セミナー予告

2003年3月、日時・場所は現在交渉中です。「多摩の再生」をテーマに第5回が開催される。**1部**／「東京再生研究会学生ネットからの発表一都立大・東大・日大」、**2部**／**コーディネーター**：神谷博、**パネラー**：大学及び多摩研究者他の予定。同窓生の皆さん是非御参加下さい。